

小山田地区水源林保全対策検討

研究第三部 主任研究員 高崎 忠勝

鶴見川流域では、昭和40年代頃から中上流域で急速に市街化が進み、流域の市街化率は約85%となっている。源流域は谷戸が入り組む複雑な地形であり、樹林・広葉樹林等が多く残り、湧水もみられる等、自然が多く残されている地域である。

近年、ゴミ等の不法投棄や資材置場等の乱造成等により荒廃が進行しつつあり、将来にわたっては相続の発生等により維持が困難になることが危惧されている。

源流域という河川環境に大きく影響を及ぼすと考えられる周辺の自然環境について、その価値と現行制度の活用による保全方策の検討を行った。

鶴見川の源流域に位置する水源林は、雨水浸透の維持、湧水復活、上流域の平常時流量の確保、良好な水質の確保といった水循環の健全化を目指す上で重要な価値を有している。また、首都圏周辺の自然環境や関東山地につながる緑のネットワークの視点から見たときに、鶴見川源流域が他流域との結節点にあたる重要な位置にある点やオオ

タカ、ホトケドジョウ等の生物が生息する点等、動植物の生息・生育環境として高い価値を有している。このように水源林を保全は良好な河川環境の形成に大きく寄与していることが確認できた。

水源林の保全に向けた現行制度の活用については、鶴見川源流域が河川区域外に位置し水源林が河川管理施設に該当しないことから水源林を保全する河川事業がないことや、都市緑地等の既存の制度による土地利用規制では民地のまま開発圧力の高い地区を規制し続けることが困難なこと、また、用地を買収して恒久的に水源林地帯を維持保全するには、都や市の財政的負担が大きなものになるといった問題がある。

水源林保全の必要性を確認したものの、現行制度の活用により水源林を保全することが困難である状況を認識した。

適正な水循環の確立に向けて水源林の保全は重要であり、その保全に向けた制度の整備が望まれる。

〈話題〉

デ・レイケの里帰り!?

「RIVERFRONT」編集部

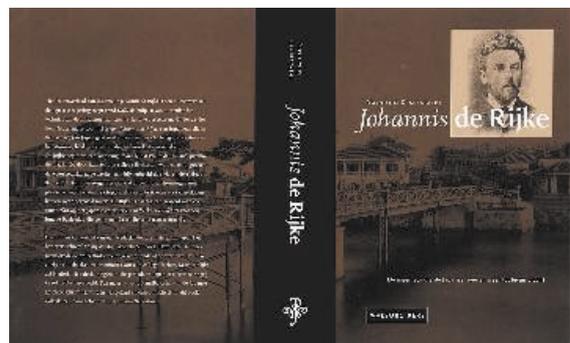
皆さんは、デ・レイケという人を御存知でしょうか？

少しばかり土木史に御興味のある読者諸兄ならばすぐに思い当たるであろうが、簡単に説明すると、『明治時代に来日し、日本の河川事業に関わること30年。淀川、木曾三川の改修をはじめ、各地の治水事業、港湾事業に功績を残した日本で最も有名なオランダ人』である。日本でもその名を知っている人は、専門家は別として、少ないのであるが、母国オランダでは彼の知名度はいたって低く、『誰？それ？』といった雰囲気だと聞く。

当センターではこの春、日本とオランダの技術交流の一環として、デ・レイケの伝記「日本の川を甦らせた技師デ・レイケ」（上林好之氏著）のオランダ語版の出版を行った。

ついに百年の月日を越えてデ・レイケと彼の業績が、『里帰り』したのである。

本書の出版をきっかけとして、恩恵にあずかった日本人はともかく、母国オランダの人々にも知ってもらいたいと思う次第である。



今回出版されたオランダ語版のデ・レイケの伝記